



男は 痛い



國友万裕

第50回

『Perfect Days』

1. 男性優位主義者と初期のフェミニストは似ている

前回の連載で、俺の女性への思いについて書いて、この連載を閉じたいと書いた。しかし、今、それを書くことに躊躇している。やはり、異性を批判するとなった時に、男は、女性よりもはるかに不利なのである。

このブログにも何回か書いたが、今や男性が大っぴらに女性差別的な発言をするのは絶対に許されない。女性の方は男を大っぴらに批判してもそのことで激しく糾弾されるということはないが、男の方は何気なく言ったことであっても、女性が差別だと感じれば、ポリコレ棒でガツンとひっぱたいてこられることは目に見えているのだ。

俺は、フェミニズムが悪いとは思っていない。しかし、自分の女性へのわだかまりを克服するのに、フェミニズムを選んだことは間違っていたのではないかと思うことがある。フェミニストたちの言っていることを聞いていると、ますます、わだかまりが増幅されていくのである。

誤解がないように言っておくが、ここで俺が言っているのは、「初期のフェミニスト」である。今のフェミニストはさすがに一方的に男を批判するようなことはしなくなっている。問題なのは 70 代くらいの高齢のフェミニストなのである。

批判されることは覚悟で、あえて初期のフェミニストに苦言をさすと、初期のフェミニストは男尊女卑の男に似ている。

俺が子供の頃は、クラス委員なんかでも、男が正で、女が副と決まっていた。当時は、男の方を上であることが男女の自然な摂理であると思われていた節があり、男性の先生だけではなく、女性の先生でもそういう価値観をもっていた。

俺の少年時代を思い出すと、女の先生に限って、「男のくせに」という言葉を口にしていたし、「女の子はお金持ちになりたいと思ったらお金持ちのお嫁さんになればいいけど、男の子は頑張らないと就職がない」「男の子は将来一家の大黒柱になら

なきやいけないのよ」と言って、男子の方にプレッシャーをかけようとする女性は多かったのである。

フェミニストに言わせれば、それは彼女たちが男社会の価値観を内面化していて、それに毒されているからだということになるのだろう。しかし、俺はそれだけではないと思っていた。男がきちっと大黒柱の役目を果たして、女には苦勞させないという考えだったら、女は苦勞しないで生きていられる。女たちが苦勞しないために、男には苦勞に耐えろと言っているように聞こえていた。

確かに最近は結婚しても仕事はしたい、専業主婦ではいたくないという若い女性は増えている。しかし、その一方で、依然として、専業主婦になりたい、今は不景気だから共働させざるを得ないだろうけど、もし可能なならば家にいたいと思っている女性も多いのである。

必ずしも全ての女性が仕事をしたいと思っているわけではないのに、フェミニストは「女はみんな男と同等に仕事をしたがっているんだ」という前提のもとに話をしている。また、男の主夫が少ないことはまったく問題にしようとしなない。

男だって、仕事が好きな男ばかりじゃない。昔は女は家庭か仕事かという二者択一を迫られるから損だと言われていて、それは映画『愛と喝采の日々』(1977)でも描かれていた。しかし、あれはバブルが弾ける前で世の中の景気が良かった頃の話である。

今や不景気。むしろ、女性の場合だったら、仕事してもいいし、あわよくば、家庭に入ることもできるし、選択肢があるから女性の方が得だと俺は思うのである。

2. 男だって悪いけど、女だって・・・。

もちろん、男にも問題はあある。昔は女の方が男よりも上みたいなことを言われると、猛り狂う男も多かった。1970年代の終わり、山口百恵と三浦友和が結婚したが、二人の主演作は、百恵・友和

と言われて、百恵のほうがビリングが上だった。これに対して、『キネマ旬報』で、ある映画記者が、「結婚したら、友和・百恵とすべきだろう」と書いていて、俺は思わず笑ってしまったものだ。

あの頃はちょうどフェミニズムの時期で、「女が強くなった」と言われていた頃だったので、あの当時の男は、社会のパラダイムの大きな変化についていけなかったのだろう。女の方が男よりも上に来るなんて、男女の自然の摂理に反していると信じている、馬鹿な男は多かったのである。

アメリカ映画でも、『コンペティション』(1980)という映画があって、ピアノコンクールで、恋人同士で参加して、女性の方が勝ってしまうため、男の方が凹んでしまって、二人の関係に問題が起きるとい話だった。

例をあげればキリはない。芸能人が離婚すると、「女性の方が収入が多かったから上手くいかなかったんだ」というのが、週刊誌やワイドショーのステレオタイプな切り取り方だった。そんな単純なものじゃないだろうに。

昔風の男尊女卑系の男は、「女に負けたくない」「男は女よりも上であるべきだ」という考え方が非常に強かったせいで、それに反論してこられるとムキになって反論する人が多かったのである。自分が育ててきた男のイメージを絶対に崩したくなかったのだろう。

俺はそういう男は馬鹿だと軽蔑していた、だから、フェミニズムに関心を持ったのだが、結局、フェミニスト系の女性もほとんど同じなのである。

これは前にも書いたかもしれないが、15年ほど前、ブログをやっていたときのことだ。俺のブログは、DV 加害者男性の脱暴力運動を指揮している男の人のつながりのブログだったので、読んでいる人は大抵はそこに入出入りしている人やそこに関心のある人たちだった。

俺は女性に加害行為をした覚えはなく、むしろ女性から被害を受けた男なので、男性の被害を訴えていた。女性の方が得だということを書いていた。とりわけ、俺たちの学生の頃はバブルの頃だ

ったから、女性の方がいっぱい金を使っている、楽しく生きているというイメージだったのである。

そのことを書いたところ、俺のブログの読者だったある女性(おそらく俺より10歳くらい上だから、今は70くらいの女性)が、ムキになって反論してきた。

「バブル女なんて、あんなのはマスコミが作り出した幻想ですよ。私の周りなんてそんな女、一人もいないですもの」と逆鱗に触れたような言い方だった。

結局、彼女たちは被害者でいたいのである。女性は被害者だ、女性は無力だ、女性のほうが損だと言っておけば、責任は男に押し付けることができる。男を傷つけるようなことをしても、それは男のせいだと言い訳ができる。「女は悪くない理論」である。

被害者でいたいと思っている彼女たちは、女よりも上でいたいと思っている男たちと何も変わっていない。

女にトラウマを負わされた男だっているのにそれを認めない女たちと、男よりも優秀で仕事のできる女はいるのにそれを認めない男たち。結局、お互いを鏡に映し出しているような姿なのだ。どっちもどっちなのである。

初期のフェミニストの問題点は、被害者の権力を男に渡そうとしないところである。それだったら、社会権力・政治権力を男が女に渡さなくても文句は言えないだろう。お互いに権威主義で自己中心的で、異性のトラウマに思いを巡らしていないのだから。

幸い、時代の流れは変わり、フェミニズムも変わった。最近の学生のレポートを読んでも、今となっては女性の方が男性よりも差別されていると思っている学生はほとんどいない。ジェンダーは男女両方の問題であるという認識が強くなってきて、女性だけが問題を抱えているわけではないというのは共通認識になってきている。

結局、俺が古いのかもしれない。考えてみればもうこの原稿が出る頃には俺は60歳。歳をとると

加速度的に時間が過ぎていく。ジェンダーの運動に関わっていた頃が、昨日のここのようなので、あの当時のわだかまりを今でも俺は引きずっているが、今となっては、そういう被害者意識の強い女性はごくマイノリティー。フェミニスト系であっても今の若いフェミニストはさすがに一方向的に男が加害者みたいな発言はしなくなってきている。

とはいうものの、若いフェミニストでも、まだ一部そういう女性は存在しているのだ。

例を挙げればキリはないのだが、FBなどSNS上であってもそのことで気分の悪い思いをしたことがあった。前に、ツイッターでエゴサーチをしていたら、俺の書いた本(『マッチョになりたい!』)について、とんでもない思い違いのコメントを書いていた女性がいた。おそらく、彼女はまだ20代くらいの若いフェミニストなのだが、おそらく学術的なものを読んだ経験がほとんどないのだと思う。

具体的には、彼女は、「國友万裕はフェミニストに親を殺された経験でもあるのか」と書いていたのである。つまり、フェミニストに恨みを持っている。しかし、俺はあの本で、女性を蔑視したようなことは一言も書いていないし、フェミニズムを否定するようなことも書いていない。その証拠に、あの本は、肉食系のフェミニストとして知られている北原みのりさんだあって、ほめてくれたのである。ところが、まだ若い彼女には本を読む読解力やジェンダーの勉強の経験がないから、そう受け取ってしまうのである。

ああいう系統の女性は、男がジェンダーについて論じようとする、何もかも男尊女卑的な先入観で見えてしまう。そういう女性はいるのである。彼女だけではないのだ。かなりフェミニズムを勉強しているインテリ女性でもとんでもない解釈をしてしまう人は、たくさんいて、やはり、まだまだ男性問題は認知されていないという思いを新たにするのだった。

3. ジェンダーの覇権は女性が握る。

2年前だったと思う。『パワー・オブ・ザ・ドッグ』という映画が話題になり、監督のジェーン・キャンピオンが女性としては3人目のアカデミー賞監督賞を獲得した。あの時、アカデミー賞の前哨戦となる何かの賞の授賞式での彼女のスピーチが問題になったことを記憶している。

確かあの時、彼女は授賞式の壇上で、実在の女性テニスプレイヤーを描いた映画『ドリームプラン』のモデルとなった姉妹たちに向かって、『あなたたちは女と戦ってきたんでしょ。だけど、私はここまで来るのには男と戦わなきゃいけなかったのよ』と発言したのだ。

彼女からしてみれば、会場を盛り上げるためのジョークのつもりだったのだろうが、これはテニスプレイヤーの女性に対して失礼だと批判を浴びたものだ。

往々にして、男の世界をのし上がってきた女性はこういう発言をしたがる。確か俺の記憶では小池さんもかつて同じようなことをおっしゃっていた。「女がここまで来るのには、男の何倍も頑張らなきゃいけないんだ」と。

政治や映画の世界はまだまだ男が牛耳っている世界だから、彼女たちがこういう発言をしたがる気持ちはわかる。

だけど、俺は男だてらにジェンダーの世界を生きてきた。そうすると、逆のことが起きるのである。

ジェンダーの世界は、まだまだ女性がトップにいる世界なので、男性ジェンダーや男性の研究者に対する認知度は浅い。だから、こういう問題となるとフェミニストたちが上から目線になる。ジェンダーは女のほうがわかっている、男にはわからないと思っているフェミニストは依然として多いのである。

しかし、これは間違いなのである。

30数年前、俺がこういう問題について勉強したいんだと指導教授に持ちかけた時だ。あの頃、アメリカではすでに男性のジェンダーの問題も徐々

に取り上げられ始めていて、そういう本の翻訳が徐々に出始めていた。ハーブ・ゴールドバーグの『男が崩壊する』やロバート・ブライの『アイアンジョンの魂』などがそうである。

その時、指導教授（アメリカ文学の大御所）からは言われたものだ。

「こういう問題についてやっていこうと思うのなら、もっとフェミニズムの本をたくさん読みなさい。フェミニズムをきちっと勉強した上で、男性ジェンダーのことも訴えなくては、フェミニストから袋叩きにされる」と。

そう言われて、俺はその後30代の頃、必死になってフェミニズムを勉強し、一時期は女性センターの図書館に置かれている本を全部読むんだという気持ちで、片っ端から読み漁った。

俺だけじゃない。中村正さんだって、伊藤公雄さんだって、男性でジェンダーを勉強している男性は、フェミニズムをくまなく勉強している。そうしなければ、フェミニストから批判されるからである。

一方で、初期のフェミニストたちが、そこまで男性ジェンダーを勉強しているだろうか。

明らかに彼女たちの方が勉強不足なのに、男であるが故に差別される、とりあってももらえない、偉そうなことを言われるという歯痒さを俺はいやと言うほど味わったのだ。

やはり、自分のジェンダーへの囚われを治療するのにフェミニストに頼ったことが間違いだった。

俺は子供の頃から男はバカだと思っていた。女に踊らされていると思っていた。しかし、結局、男尊女卑的な信念で生きている、女は下位と思っで生きている男の方が女性と付き合いやすいのである。男尊女卑的な男性だったら、「所詮、女は男よりも劣った存在なんだ。だから、大の男が女に真剣にとりあうのはみっともないんだ」という古いジェンダー観で生きている。だから、女性から嫌なことをされても、男だから理不尽なことを要求されても、「俺は男なんだ」と自分を奮い立たせて、女性と付き合うことができるだろう。そうし

なかったら、男なんてやっていかれない。

だけど、人生の早い時期に、ジェンダーに囚われてしまった俺は、すべて「男女平等」という物差しで女性を見てしまうため、女性と付き合うことができないのである。

男は理不尽なことだらけなのである。女性だって理不尽なことは多いだろうけど、女性の場合は少なくとも文句は言える。一方で、男はまだ文句すら言えないという状況なのだ。

4. こころない悪口は禁止すべき！

俺は母に一つだけ怒っていることがある。

母は家族のために自分を犠牲にしてきたような人だ。60過ぎてから自分の人生が開けて、仕事でも成功したものの、それまでは人の何十倍も苦勞した人だった。

俺は大学に入った後、アメリカの大学に行きたいと思っていた。俺は立命館に合格したが、立命館という大学のことを何も知らなかった。高野悦子さんの『二十歳の原点』は読んだことがあったが、学生運動世代ではないので、シュプレヒコールやらなんやら言われても、俺にはピンと来なかったのである。

俺は高校にも行かなかったのだから、人より遅れるのは仕方がない。もうしばらく浪人して、自分の気に入ったところに入ろうかという気持ちもあった。しかし、母は、もう1年浪人するよりも、アメリカに行くことを考えた方がいいからと言ってきていた。ところが、いったん大学に入学して、その話を具体化しようとする、母は、「アメリカに留学させるような、お金はない、休み中にちょっと旅行に行くぐらいにしとかなないと」と言い始めたのである。

母は、先のことをあまり考えず、その場しのぎで生きてきた人だ。母は、大学に行った後のことは、そこまで考えていなかったらしいのだ。大学に入れれば、適当にどうにかなるだろうと思っていらしたらしい。

母は、人の10倍くらい苦勞は多く、人一倍人の面倒を見てきた人で、俺は母がいなかったらここまで生きて来れなかった。だから母には感謝しているけれど、このその場しのぎの嘘だけは許せなかった。

俺は大学に入った後、アメリカ留学準備を始めようと思っていたのに、まったくその目標がなくなったのである。英文科を選んだのも、アメリカに行きたいという思いがあったからだ。そうでなかったら、英文科なんて選んでいない。

日本の社会で、大学と言ったら一つの身分制である。卒業大学はずっと一生ついて回る。例えば、家柄のいい金持ちの子であれ、貧乏な下層の家庭の出であれ、同じ大学を出れば、同じ階層とみなされるのが日本の社会である。

とりわけ、俺たちの頃はその傾向が強かった。

しかし、これは立命館の卒業の人の多い、対人援助学会のマガジンで言うのは本当に憚られるのだが、俺は、今の立命館だったら好きになれていたかもしれないが、あの当時の立命館とはどうしても合わなかったのである。それは入る前から歴然としていた。大学のパンフレットを開けただけで、この大学とは俺は合わないという予感があったのだ。しかし、どっちみちアメリカに行くのだから俺は自分に言い聞かせ、立命館に入ったのだった。

しかし、やはり予感は当たった。

当時の立命館は、「貧乏・学生運動・汚い」というイメージであり、俺は元祖ワンルームマンションのお坊ちゃん、学生運動なんかは全然わからない。俺自身はイケメンではないが、だからこそ綺麗なものに人一倍憧れる。そういう子だったのである。まったく、俺の理想とはかけ離れていた大学だったのだ。

しかも英文科。英文科だから女の子が多いことにはある程度は覚悟していた。俺は女の子から、キモいと言われ続けてきたので、女の子が多いのは恐怖だった。しかし、アメリカに行くためにあえて英文科を選んだのに……。あの頃の立命館は

英文科は2クラスで、俺の入ったA組はなんと8割くらいを女性が占めていた。B組だったら半々だったのに。なんという不運。

さらに、あの当時の立命館はクラス単位の授業が多いことが売り物になっていて、そのためクラスの仲間のつながりは他の大学よりも強いと言われていた。そのため、クラスに友達が多い人には楽しい大学なのだろうが、俺は引きこもりだったため、クラスに溶け込むことはできず、また例によって「ぼっち君」であることで白眼視される日々が始まったのである。

「なぜ、よりによってこの大学を」。まさに神様のイタズラとしか思えなかった。俺はどっちみち下宿するわけだから、東京の大学でも名古屋の大学でも構わなかったのだ。他にもたくさん選択肢はあったのに、なぜ、寄りによって・・・。

だけど、俺はあの頃前向きだった。女の子が多くて、こっちが彼女たちに偏見をもたずに接していれば、どうにか道は開けると思っていた。女性に対する偏見を治すためのチャンスだと前向きに捉えようとした。

あの頃の俺はできる限りポジティブに物事を捉えようと考えていたのである。しかし、現実はその甘くはなかったのだ。それまで不登校で、高校も行かなかった俺が、大学に入ったからと言ってすぐに溶け込めるわけではない。女の子と付き合えるわけがない。俺は自尊心が最低ラインまで落ちていたのである。

俺は今でも女性が怖い。

今でも時々、心無い女の先生から「あの人、気持ち悪いわ」と陰口を言われているという話を聞く。そのことを他の女性に話したら、「女が気持ち悪いなんて言うのは、大して深い意味もなく言っているんですよ。気にしなきゃいいのよ」とのことである。しかし、それを言うんだったら、男だって大して深い意味もなく女にセクハラしているんだよ。女性に「キモい」なんて言われると、大抵の男は傷つくのである。だから、やめてもらわなくては！

女性の悪口はマスターベーションだと言われる。女性は、人の悪口を言うことで、自分のフラストレーションを発散しているのだ。しかし、マスターベーションは大っぴらにするようなことではないはずだ。

男が自分の部屋でAVを見ながら、マスターベーションをするのは許されても、女性のいる前でマスターベーションをしたら、公序良俗に反するとフェミニストは怒るはず。そうであるのならば、女も人の悪口はおおっぴらには言わないという女性になってもらわなくては！これまでずっと女性の悪口のターゲットになってきた俺は、女性だから安易に他人の悪口を言っても許されるという考えは断固として許せないのである。

幸い、最近になって、室井佑月さんの「キモい」という言葉への批判が話題になって、少しはこの問題に陽が当たったかもしれない。しかし、室井さんは女性である。女性だからこそ、フェミニストを批判することが許される。男がフェミニストを批判するとなると激しい反発を喰らうだろう。

男性被害も、ジャニー喜多川さんの事件が明るみに出てから大きく日の目を見た。とは言っても、ジャニーさんは男性である。性の加害者は男性とは限らない。女性が加害者になるケースだってあるし、現に俺はそのトラウマに今も苦しんでいる。しかし、女性が加害者で男性が被害者などという話をメディアがとりあげるだろうか。

5. メンズリブからクリスチャンへ

30代になって、メンズリブ運動に加わったのも、これもどこか間違っていた。メンズリブに加わったことで、勉強にはなったし、さまざまないい出会いもあった。しかし、結局、俺の傷つき体験を理解してくれる人たちではなかったのだ。

いや、中村正さんは、ぼんやりと理解してはくれているのかもしれないが、正さんも含めて、メンズの男性たちは、決して女性に馬鹿にされるようなタイプではない、男として自信がないと言う

タイプでもない。奥さんもフェミニストという人が多いし、むしろフェミニストのアライである。

そのため、日本のメンズリブは、男の加害者性に注目してきている。俺なんかは被害にあった立場の男なのに、被害を否定されてしまう。あれでは共感できないのである。

俺がメンズリブと決裂したのは 36 歳の頃である。2 年間べったり頑張ったのに、いとも簡単に別れは訪れた。

その後は苦しい日々が続いた。仕事の方もうまく行かず、大学で教えるのは厳しくなる一方。転職しようにもうまく行かない。

俺は 30 代の終わりの頃、関西カウンセリングセンターに通っていた。そこで、ある男性の先生との出会いがあった。講義の一環としてカウンセリングを受けるのだが、俺はついた人がよかった。あれは、普通はまだカウンセリングの勉強をしている素人の人がカウンセラーなので、普通はプロのカウンセラーほど経験も実績もない。しかし、俺がたまたまつくことになった人は、当時 60 代の男性。かつてはエリートサラリーマンだったのがうつ病になり、それからカウンセリングの勉強を始めた人で、学者肌の人だった。

その先生に俺は自分の抱え込みを洗いざらい話した。

するとその先生は、「女同士集まって誰かの悪口を言ったり、ちくりちくり噂話をしたりという女性独特の部分に苦しまれたんですね」と言ってくれた。

この台詞は、まさに俺がメンズの人たちにずっと欲しかった台詞だった。この人が初めて俺の女性に対するわだかまりを受け止めてくれたのである。残念ながら、メンズリブの人たちは受け止めてくれなかったのである。日本の男性運動の人たちは、モテ男系だから、女に馬鹿にされたり、「キモい」と言われたりする男のトラウマがわからないのである。

このカウンセラーの人のおかげで、ある程度は溜まっていたトラウマが消化できた。あの人、今

はどうしているだろうか。いつか挨拶しに行かなくてはと思いつつ 20 年が過ぎた。あの当時 60 代だったから、もう亡くなっているかもしれない。しかし、感謝している気持ちはあの人の魂には伝わるだろう。

そして、40 代になり、仕事が増え、経済的に少し余裕が出てきた頃、今度はメンズリブ時代に知り合った男の人の団体に入入りし始めた。

一時期は、ここの人たちと埼玉のヌエックのワークショップについて行ったり、料理教室をしたりで、うまく行っていたようにも見えた。しかし、ここでも決裂が起きた。

ここも基本は男性の脱暴力支援である。従って、やってくる男の人はまったく俺のトラウマを理解できないような人ばかり。俺がうまく行くわけはなかったのだ。今思えば、俺は自分の居場所が欲しかったから、無理して合わせていたのだろう。

その後、俺は 47 歳の時に初めて単著を出した。これはそれなりに評価してもらえ、朝日新聞や京都新聞にも記事が出た。

その後、50 歳の時に、2 冊目の単著が出て、これは新書だから安いせいもあり、この本がきっかけで、週刊文春やサイゾーなど、有名雑誌に小さいながら記事が出たりもした。

その間、共著やテキストも出し、仕事も増え、40 代の終わりから 50 代にかけては、充実の 10 年間だった。

学生たちとの関係も良好で、慕ってくれる学生がどんどん増えた。男の元教え子とは温泉やプールに行ったこともある。女子学生とは一緒に写真を撮って、Be Real に Up したりもしている。

その一方で、50 代の半ばになって、クリスチャンの先生と知り合いになり、その先生や学生たちとアメリカツアーにも行き、そして、去年の 12 月のクリスマスイブ。ついに洗礼を受けて、正式なクリスチャンとなった。

こうやって見てくると、俺の人生は、徐々に進化はしているのである。

これまでの連載でも書いてきた通り、俺の大人

になってからの人生は、仕事と家族を除けば、カウンセリングとマッサージ、水泳とボクシング、社会運動と宗教だったと思う。

この中で、もうカウンセリングはいらない。もうありとあらゆるカウンセラーについてきているので今更受けても得るものはない。社会運動ももう懲り懲りである。社会運動を否定するわけではなく、俺は元々社会運動は生理的に受け入れられないのだ。

水泳は、ボクシングを始めてからほとんど行っていないが、泳ぎは一旦覚えれば忘れることはないと言われる。またもっと歳をとって気が向けば始めればいいかと思っている。マッサージは、お金のゆとりがある限りはこれからも続けていこう。

そして、宗教は、仏教を勉強したこともあるけれど、やはりアメリカが好きな俺にはキリスト教が一番いいのだ。幸い、教会で一緒に先生が、ピアノを安いお金で教えてくれることにもなった。ピアノは前から憧れていたもので、この点でもプラスだ。

これからは人生の終活。自分の合うものと合わないものはだいぶわかってきたので、気負わず、徐々に歳をとっていきたいと思うのである。

6. 『Perfect Days』(ヴィム・ヴェンダース監督・2023)

この映画、大感動だった。

前からご鬣貝だった役所広司が一人暮らしのお金もない男を演じている。役の上では、もっと若い設定になっているのかもしれないが、役所広司は俺より7つ年上で、もう60代の後半である。

その彼が、細々と市井の片隅に生きる独身男を演じている。俺と重なり合うのだ。

主人公の過去については詳しく語られない。途中で、女の子が出てくるので、彼の娘なのかと一瞬思ったのだが、そうではなく、姪っ子だということがわかる。俺は結婚歴がないし、子供いないから、この部分でも共感できた。

映画は、その彼の何気ない日常生活を淡々と綴っていく。特別大きな事件が起きるわけではない。だけど、片隅に生きる彼の生活が愛おしく思えてくる。そんな映画なのである。

見ていて、見習わなくてはならないと思ったのは部屋が綺麗であるということ。畳2部屋の安アパートで暮らしている彼だが、部屋がゴミひとつないくらいに綺麗で、「清貧」という言葉を思い起こさせるのである。

こういう生き方だったら俺だってできる。

俺は子供の頃から男集団に外れた子だったため、将来に希望が持てなかった。世の中は男の社会だと初期のフェミニストは言うが、しかし、男の規範に外れた男はその中で女性以上に惨めな思いを味わわなくてはならなくなるのである。

これまで、結婚もせず、ほとんど女性と付き合いわず、やっと50歳ぐらいになって、男の友達ができるようになって、仕事も非常勤で、常に劣等感を感じながら生きてきた俺に対して、「男の人は見えない権力を握っている」「結局は男で決めるのよ。女はいつだって蚊帳の外」なんて言われたんじゃカチッとくる。

俺は生物学的には男だけど、権力なんて握ったことはないし、蚊帳の外に置かれてきた男なわけだから・・・男は一種類じゃないんだよ!!!

それを考えて！初期のフェミニスト。